



文と写真 敷田麻実 (野生生物保護学会会長)

「冬・慣れないという可能性」

北海道の冬も三度目ともなると、すっかり慣れて、寒さを甘く見てしまふ。このくらいの寒さだからと、身体も心も、高をくくってしまふからだろうか。だからといって冬の寒さが和らいだわけでも、しのぎやすくなつたわけでもない。

経験を繰り返すと、人はどんなことにも慣れる。最初の年は零下十度にもなる札幌の夜の冷気に身を縮こめた。しかし、今では防寒具さえ備えておけば、不安は感じない。

慣れるということは「耐性」がでることであり、生物にとつては環境適応力がつき、生きる力が増すことだ。しかしその一方で、「いつもしていることだから」、「やったことがあるから」など、人が油断して失敗する場面で聞かれがちなセリフの背景にも「慣れ」がある。

人は、幾度か体験して納得すると知った気になり、対象への興味を失う。慣れることで「知ろうとする力」は弱まり、生のダイナミズムは消える。

慣れを求めてはいけない。不慣れや知らないことへの不安に臆せず、未知のものと対峙する力。これこそ、人の持つ可能性である。

